

New York Lullaby

ニューヨーク・ララバイ

Francesco Cafiso New York Quartet

フランチェスコ・カフィーソ・ニューヨーク・カルテット

- ララバイ・オブ・バードランド**

Lullaby Of Birdland 〈G. Shearing〉(7:53)
- リフレクションズ**

Reflections 〈T. Monk〉(4:10)
- ポルカ・ドッツ・アンド・ムーンビームス**

Polka Dots And Moonbeams 〈J. Van Heusen〉(6:22)
- マイ・オールド・フレ임**

My Old Flame 〈A. Johnston〉(9:40)
- エスターテ**

Estate 〈B. Martino〉(11:34)
- ホワッツ・ニュー**

What's New 〈B. Haggart〉(7:19)
- イマジネイション**

Imagination 〈J. Van Heusen〉(6:28)
- ウィロー・ウィープ・フォー・ミー**

Willow Weep For Me 〈A. Ronell〉(10:10)
- スピーク・ロウ**

Speak Low 〈K. Weill〉(7:42)

フランチェスコ・カフィーソ Francesco Cafiso (alto Sax) **デヴィッド・ヘイゼルトajn** David Hazeltine (piano) **デヴィッド・ウィリアムス** David Williams (bass) **ジョー・ファンスワース** Joe Farnsworth (drums)

録音：2005年6月23、26日　ザ・スタジオ、ニューヨーク

© © 2005 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan.
Recorded at The Studio in New York on June 23 and 26, 2005.
Engineered by Katherine Miller.
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound：
Shuji Kitamura & Tetsuo Hara.
Front Cove Photo：Mary Jane Farnsworth.
Artist Management：M. G. M. Produzioni Musicali.
Designed by Taz.

ことがあったからだ。するとフランチェスコは、いけないことを知られたとでもいう顔つきで、「難しいと思ったことはない」と首を横に振った。

「初めてサクスを手にした日の楽しさは、今でも覚えてる。あ、でも、自分が上手いと思っているわけじゃないんだ。ミュージシャンなら誰でも上手くなりたいし、そのために練習するのは当然です。ぼくも今日よりは明日、明日よりはあさっての方がうまくなっていたいと思うから、練習に励んでいます」

尋常ではないフランチェスコの上達に注目した最初の人とは、地元のサクスの先生だった。そして9歳のときには、もうフランチェスコはイタリアのジャズ・フェスティバルのいくつかに登場するようになり、初めての賞である「マッシモ・アルバーニ・ナショナル・アワード」を受賞した。フランチェスコが「尊敬し、音楽上の父だと思っている」と語るウィントン・マルサリスと出逢ったのは、2003年7月、ベスカーラのジャズフェスでだった。同じく早熟の演奏家だったウィントンは、フランチェスコの才能をいち早く見抜き、そのときの（セブテットでの）ヨーロッパ・ツアーに彼を伴った。

「素晴らしい体験だった。それも、1週間とかじゃなく、1ヶ月もの長い間だったから、ぼくはウィントンから様々なことを教わった。昔のブルース、本のなかを探しても生きたジャズはないこと、先輩たちとの共演の機会を大事にすること。音楽のことは、どんなことでもとめていてねいに教えてくれた。一緒にステージに立たせてもらい、プレイした後、出来があまりよくないとホテルに戻ってから練習をつけてくれた。その父親のような温かさにすっかり大好きになって、ツアーが終わるときには大泣きでした（と涙ぐむ）」

フランチェスコ・カフィーソとウィントン・マルサリス、2005年6月23日

そのウィントン・マルサリスとのツアーが、フランチェスコを新たな地平に押し上げた。コンサートを見たプロデューサーたちから声がかかり、03年12月には「ウンブリア・ジャズ・イン・ザ・ウィンター」に出演。翌04年1月に、初めてNYに渡り、「インターナショナル・ジャズ・フェスティヴァルズ・オーガニゼーション・アワード」を受賞。このときには同市で開催された「ウンブリア・ジャズ・イン・NY」の一環として、ジェームス・ウィリアムスのトリオとの共演でヒルトン・ホテルのステージに立った。そればかりか、ウィントンの招きでリンカーン・センター・ジャズ・オーケストラ（以下LCJOと略す）のエヴリー・フィッシャー・ホ

ールとアリス・タリー・ホールでのコンサートにも出演した。

04年5月には再びNYを訪れ、ジェームス・ウィリアムスとハリー・アレンのトリオと共演、LCJOとの再共演を果たした。04年夏は、もっと大忙し。イタリア中のジャズ・フェスに出演し、そこでLCJOの他、ハンク・ジョンズ、カウント・ベイシー楽団、ジョー・ロヴァーノ、マンハッタン・トランスファーたちと共演。ニューオリンズも訪ね、エリス・マルサリス他から薫陶を受けた。そして11月には「ロンドン・ジャズ・フェスティヴァル」の一環として行われた「ワールド・サクソフォン・コンペティション」に参加。見事最優秀に輝いた。

05年はさらに忙しく、スペインのジャズ・フェスでチャーリー・パーカー没後50周年記念コンサートに出演、「ニューオリンズ・ジャズ・フェスティヴァル」、オーストラリア、メルボルン市で行われたジャズフェスに参加。私はフィランチェスコにこのメルボルンで会ったのだったが、2週間に渡る会期中彼ははずっぱり。ハリー・アレンのカルテットのゲストとしての演奏が主だったが、ほかにもイタリア人ミュージシャン、たとえばベテラン・ベーシスト、ジョヴァンニ・トマーソのグループとの共演、自身のカルテットのピアニストであるリッカルド・アリギーニとのデュオと盛りだくさんなプログラムを、こなしていた。あえていえば、慣れたリッカルド・アリギーニとのギグが最もよくなく、毎日午後フランチェスコのためにリハーサルをもうけていたハリー・アレンとの共演が、抑制が効いた表現で、最もよかった。

そしてこのオーストラリアでのジャズ・フェス出演の後、イタリアに戻り「ウンブリア・ジャズ」でエンリコ・ラヴァと共演。今や同ジャズフェスの看板スターの一人としての大役を果たした後、フランチェスコは日本デビュー作にして初のスタジオ録音作『ニューヨーク・ララバイ』のレコーディングに臨んだのだった。

フランチェスコ・カフィーソ、2005年6月23日

フランチェスコ・カフィーソは、こういった音楽活動の他、学生としては地元ヴィットリアの語学学校に籍を置き、と同時に、ペリーニ音楽学校でフルートを専攻しつつ、ピアノの勉強も継続している。

若くして才能があるとは何と忙しいことかと、書いているだけで目が回るが、本人は快活な人柄でいたって活動的だ。メルボルン市では連日深夜2時までのクラブ・ギグがあったから朝こそは眠そうだったが、人のコンサートにも聴きによく顔を出していたし、音楽に向かう姿勢は真剣そのものだった。

最も影響されたミュージシャンは？

「ジャズの歴史に名を連ねる、すべてのミュージシャンが先生だ。チャーリー・パーカー、ジョン・コルトレーン、ルイ・アームストロング、ビル・エヴァンス。それぞれのミュージシャンの音楽が、ぼくに新たなエモーションを教えてくれた」

最も好きなアルト・サクスメーカーは？

「一人にはしほれないよっ。パーカーに、ジャッキー・マクリーン、フィル・ウッズにソニー・スティット」
作曲もするの？

「します。10曲くらいは、あると思う。メロディがまず脳裏に浮かぶんだ。それをピアノで弾き、コードをつけていく。この間はね、眠っているときに、夢を見てメロディを歌っていたそうだ。起きてすぐ、そのメロディを覚えていたから、ピアノに向かい書き写したよ」

あなたにとってのゴールは？

「わからない。ぼくは今15歳で（インタビュー当時）、成長して変わっていくにちがいないから。30歳で今と同じように考えると、思えないもの」

近い将来の夢は？

「日本に行って、演奏したい。日本が好きなんだ」

どうでしょうか。少しはフランチェスコ・カフィーソというミュージシャンの、今の輪郭が見えてきたでしょうか。

フランチェスコ・カフィーソ、2005年6月23日

彼自身の公式サイトが、以下のURLで見ることができるから（英語あり）、興味のある方はどうぞ。今後の彼の活躍が追えるでしょう。http://www.Francescocafiso.it/
きっと、この『ニューヨーク・ララバイ』を聴いたあなたは、近い将来誰かに自慢話をすることになるだろう。フランチェスコ・カフィーソを日本デビューのときから、聴いていると。私も、その一人になるだろう。イタリアから誕生した、このジャズの若き才能に、ここ日本からもエールを送り続けたい。

2005年8月記　中川 ヨウ / Yo Nakagawa

期待の星は、16歳

イタリア生まれのアルト・サクスメーカー、フランチェスコ・カフィーソのことを、ウィントン・マルサリスは「イタリアで見つけた宝石」と言い、ハリー・アレンは「これほど若くて才能にあふれたプレイヤーは、見たことがない」と言った。

そう、フランチェスコ・カフィーソはまだ16歳なのだ。今あなたが手にとっている日本デビュー・アルバムを、ジャケット写真を見ないで聴いたら、誰が彼を16歳だと思うだろうか。しかし、フランチェスコはふくいくたるアルトの音色とテクニク（加えてキュートな美少年ぶり）で、イタリア・ジャズ界では既に「スター」。米ジャズ・シーンでも「ライジング・スター」として認知され、将来を楽しみにされている逸材なのである。

フランチェスコ・カフィーソ、2005年6月23日

そんなフランチェスコが、2005年6月21日から26日まで、NYの新名所となっている（タイム・ワーナー・ビルに移転した）リンカーン・センター内のジャズ・クラブ「ディジーズ」で公演を行った。デヴィッド・ヘイゼルトajn（p）、デヴィッド・ウィリアムス（b）、ジョー・ファンスワース（ds）というというベテランたちを迎えた、フランチェスコの「NYカルテット」での演奏。

イタリア人ジャズ・ミュージシャンが看板をはって、NYで1週間公演するのはこれが初めてだそうで、イタリア、ウンブリア・ジャズ・フェスティバルの創立者でディレクターでもあるカルロ・バグノッタは「この快撃を成し遂げてくれたことは、イタリア・ジャズ界にとって記念すべき出来事だ」と語り、本人も5月、私がオーストラリアのジャズ　フェスで会ったときに「興奮している。アメリカではNYが一番好きな街なんだ。全身全霊をこめて演奏します」と、自らに誓っていた。

この期間は、「JVCジャズ・フェスティバルが開催される時期と重なっていたため、観客の動員を心配する向きもあったが、杞憂に終わり、「ディジーズ」に足を運んだ観客は、演奏が進むにつれてフランチェスコの外観や年齢を忘れ、彼の演奏と、4人が繰り広げる世代も国境も超えたジャズの会話を楽しんだのだった。

本作『ニューヨーク・ララバイ』は、「ディジーズ」での公演があった1週間のうち、なか日と楽日をあて、同じメンバーで録音された。彼らの演奏レパートリーから、原哲夫プロデューサーが9曲のスタンダードを選曲、スタジオ収録したものだ。

フィランチェスコ・カフィーソには、イタリア盤で既に3枚のライブ・アルバムがあるが、本作が彼にとって記念すべき初スタジオ録音作となるわけだ。

フランチェスコ・カフィーソ、2005年6月23日

お聴きのように、フランチェスコ・カフィーソのアルト・サクスは、まずサウンドが素晴らしい。小柄な体軀なのに音が大きく、テクニクも自然と、即興のアプローチにも成熟したものを感じさせる。低音から高音へと自在に昇っていくときのさまは、音に翼があるかのような。また朗々とメロディを歌い上げるときには、イタリア人らしく「歌うこと」へのリスペクトをもって、聴き手を惹きつけていく。

超絶技巧の曲も得意で、そのテクニクで聴き手の目を丸くさせるのが常だが、この日本デビュー作では、彼の歌心に魅せられた原プロデューサーの意向で、テクニクよりは歌心に焦点を合わせて選曲がなされている。とはいえ、随所で技量が披露されるから、その点も充分に楽しめる。

先にふれた、フランチェスコのイタリアで発売された3枚のライブ・アルバムは、本作ほどの成熟を感じさせることはなかったから、これも彼が、赤丸急成長中であることの現れだろう。

フランチェスコ・カフィーソ、2005年6月23日

さて、彼はいったいどこから、どんな経路で、私たちの前にやってきたのか。

フランチェスコ・カフィーソは、1989年5月24日、イタリア、シチリア島のヴィットリアという小さな町で生まれた。両親と6歳上の姉に可愛がられて育ったとはいえ、とりたてて音楽的な環境にあったわけでもないのに、7歳のときにサクスの勉強を始めた。

「何か、楽器が習いたいと親にねだったんだ。よい先生がいるからと、サクスを習うことになった。初めからジャズ。基礎をやり、主にスタンダードを学びました。クラシックの勉強はしていません。アルト・サクスに出逢えたことが、ぼくにとって何より大きな幸せでした」

もしかしたら、サクスの演奏を難しいと思ったことがないんじゃない？　私は、恐いモノ見たさで聞いてみた。ソニー・ロリンズや、ジャコ・パストリアスといった特別なミュージシャンたちが、楽器を習い始めてすぐにプレイできた、演奏を困難だと思ったことはないと話してくれた